

# 行ってききました

## '95日韓友好T.Y.S.S少年の船

8・16～8・21

三隅町ふるさと振興担い手育成事業の一つとして今年も小・中学生11名が派遣されました。

結団式のときの緊張いつぱいの顔から、帰国後のたくましい顔に、すてきな体験がおおくあつたのだらうと思いました。

「この体験を多くの人に伝えるのが日韓友好の一番の近道…」  
そう言う児童・生徒の皆さん。これからの三隅町がたのもしく楽しみにになりました。  
ここに、報告文の一部を抜粋して町民の皆様にご紹介します。

### 一番の収穫は友達

明倫小 田村振一

解団式が終わるともう終わってしまったのかあとと思いました。長いようで短かったこの5泊6日の旅行の中で、韓国やその他の場で得たものといえば言葉が通じなくなつて気持ち通じ合うという事です。他にもたくさんさんの事を体験しました。だ

私がおどろいたのは、韓国の人たちの表情など、私たちにそっくりだということでした。みんなとても優しく、私は少し安心しました。韓国の人は、日本の歌をきれいな声で歌うのです。すごいなと思いました。踊りするとき韓国の人たちは私たちの方へ上がつて来て一緒に踊るように手をにぎつてきました。急なことですごくはずかしくて何をしたいのかわかりませんでした。でも、韓国の人は、私たちの手を動かして踊りを教えてくれました。私も言われる通りにやってみました。韓国の人も、それを見てにっこりと笑ってくれました。それが、とてもうれしく感じました。

### 初めての外国

浅田小 石村佳代

韓国の子どもたちとの交流会。



### 「行くぞ」

浅田小 大田雄一

行く前から体調をくずし、病院へ行き、どうしようか5泊6日の旅が不安だった。高い熱と咳、毎日がつらかったが、とうとう出発の日が来てしまいました。家族全員で下関まで見送りに来てくれた時、帰りたいやら行きたいやらの気持ちでいっぱいだった。そして、出国のとき「行くぞ。」

少年の船の目的、韓国の人たちと一緒に交流会を楽しみにしていた。ゲームや名刺交換などをした。日本人と韓国人とでは話せないけれど、心は通じ合つたと思う。  
いよいよ最後の夜が明けて友達との別れがきた。涙があふれそうになるくらいつらかった。

### 「少年の船に

乗ってできた

ぼくの宝物」

明倫小 石津真人

8月6日、ぼくが待ちに待った韓国旅行の日が来ました。午後6時、いよいよ船が韓国に出発する時が来ました。そして、いつせいにみんな紙テープを投げました。ぼくのテープはちゃんと親の手に渡りました。ぼくは、その時いい出発になったなと思いました。

6日も家族とはなれて暮らすのは初めてで少しさみしくなつたけど、気持ちを切りかえていろいろなことを学び、そして元気に帰つてこようと心に決めました。

いろいろな所を観光しているとますます友達が増えていきました。楽しい時間もあつたという間に終わり帰国の日が訪れました。

船の中では、Tシャツやぼうしにみんなからのメッセージを書いてもらいました。記念に写真もとりました。この6日間で韓国のことが少し分かつたような気がします。そして、何よりの宝物は、こういう機会です。できない友達がたくさんできたということ。

### 第一歩は、

私たちから

明倫小 佐伯幸江

「友達はできるだろうか。」  
「韓国の人はいったいどんな感じだろうか。」  
「どうして私なんか選ばれたんだらう。」

でも、そんな不安はすぐふきとばされてしまいました。友達はすぐにでき、私の目から見た韓国の人達はやさしくて気がきいてとても積極的でした。どんなところが積極的かという交流会のときです。韓国の人はローリースケートなどを使ってダンスを踊ってくれました。その時の顔はいきいきとしていてぜんぜん「はずかしい」という感じではないのです。すぐくっつきよくて自然とはくしゅができました。そういう韓国の人の「積極的」という気持ちにあらがれました。

